『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』24（2022）：177-209

中国ゼロコロナ政策下における内モンゴルでの長期滞在
―フフホト市のロックダウンを経て―

外賀　葵

キーワード：コロナ禍、内モンゴル、ロックダウン、移動制限、ゼロコロナ

１．はじめに

本稿の目的は、コロナ禍における中国、主に内モンゴル自治区フフホト市での長期滞在の一事例を報告することである[1]。

筆者は表 1 に示す通り、2019 年 9 月 1 日から 2020 年 2 月 19 日までの半年と、2021 年 4 月 27 日から 2023 年 1 月現在[2]に至るまでの 1 年半以上、2020 年 2 月 20 日～2021 年 4 月 27 日の日本への一時帰国の期間を挟んで、中国に滞在している。本稿ではまず、筆者が留学生として中国内モンゴル自治区フフホト市およびアラシャー盟に滞在したコロナ禍以前からコロナ禍初期の状況を報告する。続いて、コロナ禍において各国・地域内での水際対策及び取り締まりが強化される中で、筆者が日本語講師としてフフホト市へ再び渡航し、フフホト市での 2 度のロックダウンを経験することになった滞在状況について報告する。最後に今後の展望を述べる。なお、本稿で言及する地名は図 1 の通りである。

表 1. 筆者の状況と滞在時期および滞在場所

状況	滞在時期	滞在場所
留学生としての滞在 ―コロナ禍以前からコロナ禍初期へ―	2019年9月1日～2020年1月23日	中国 内モンゴル自治区フフホト市
	2020年1月23日～2020年2月19日	中国 内モンゴル自治区アラシャ盟
日本への一時帰国	2020年2月20日～2021年4月27日	日本
教師としての滞在 ―2度のロックダウンを経験―	2021年4月28日～2021年5月12日	中国 山東省青島市（経由地、隔離期間）
	2021年5月12日～2021年5月20日	中国 内モンゴル自治区フフホト市（目的地、隔離期間）
	2021年5月20日～2022年7月16日	中国 内モンゴル自治区フフホト市
	2022年8月1日～2023年1月現在	中国 内モンゴル自治区フフホト市

[1] 本稿はフィールドワークが不可欠な学問分野の一つである記述言語学を専門とする筆者が、中国の主として内モンゴルにおいて体験した「コロナ禍」を主観的に記述するものである。したがって、コロナ禍の全体的な動向の分析や国家としての政策を客観的に論じるといったものではないことを最初に断っておく。

[2] 本報告の刊行年は 2022 年になっているが、状況を鑑み、一部 2023 年 1 月の内容にも言及している。

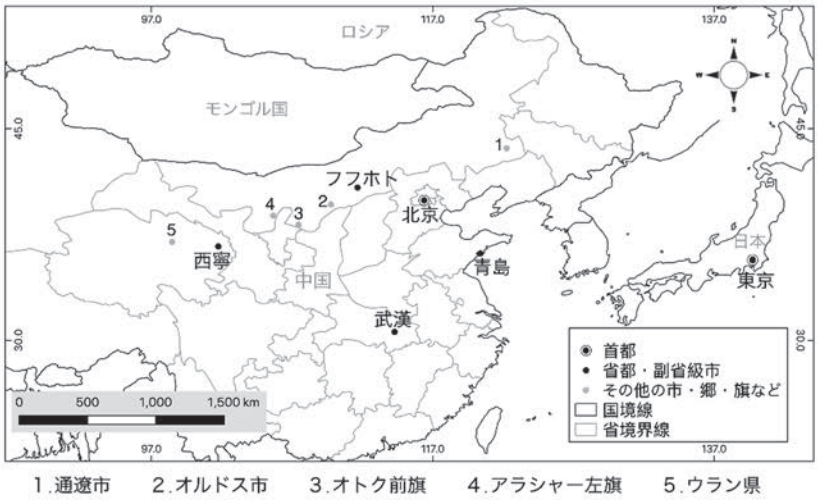

図 1. 本稿で言及する地名（ウニバト作成）

２．留学生として滞在したコロナ禍以前からコロナ禍初期

２．１．フフホト市における滞在：2019 年 9 月 1 日～2020 年 1 月 23 日

筆者は記述言語学を専門とし、京都大学文学研究科博士課程に在学中の 2019 年 9 月から 2020 年 8 月までの 1 年間、内モンゴルで話されるモンゴル語の文法記述を目的として、内モンゴル大学に留学した。コロナ禍以前の当初は留学期間の 1 年間、一時帰国することなく内モンゴルに滞在し、大学のあるフフホト市での生活を中心としながら長期休暇にはフフホト市以外の地域でのフィールドワークを行うことを計画していた。しかし、結果的には後述するように 2020 年 2 月下旬での帰国を余儀なくされ、3 月から始まる後期授業は Tencent meeting を用いてオンラインで受講することになり、留学期間の最後まで内モンゴル大学に戻ることはできなかった。

2019 年 12 月 12 日に武漢で新型コロナウイルスが確認され、中国国内では徐々に「新型コロナウイルス」がトップニュースに上りつつあった 2019 年の年末に調査協力者となるモンゴル語アラシャー方言話者の方と出会ったことをきっかけとして、冬期休暇中の 2020 年 1 月 23 日から 2 月 1 日までの予定でアラシャー盟でのフィールドワークを計画した。なお筆者は 2020 年 1 月 19 日から 1 月 22 日まで内モンゴル自治区通遼市でのフィールドワークも行っているが、コロナ禍の影響は全くなかったため報告の対象から外している。

２．２．コロナ禍初期におけるアラシャー盟での滞在：2020 年 1 月 23 日～2020 年 2 月 19 日

フフホト市からアラシャー盟への出発当初となる 2020 年 1 月 23 日頃、中国国内では武漢を中心とする新型コロナの脅威が人々の注目を集めていたが、未だ中国全土で対策が徹底される時期ではなかった。そのため、幸いにも調査地の内モンゴル自治区アラシャー盟に行くことができた。

アラシャー盟での調査の主な目的は、アラシャー方言話者の方々のお正月（旧正月）の過ごし方を知ること、自然談話の収録、基本語彙の収集であった。アラシャー盟アラシャー左旗出身で、中国の大学で教鞭をとっていらっしゃるアラシャー方言話者の方の帰省に同行する形でアラシャー盟へ赴き、帰省先のお宅で滞在させていただいた。到着して間もなくは、新年を迎える準備で、せわしなくも温かく賑やかな雰囲気であった（写真 1）。しかし 2、3 日も経つと状況は一変し、飲食店や宿泊施設が一斉に休業となり、予定されていた宴会等は全て中止となった。日に日に状況が深刻になり、到着から 1 週間もたたないうちに厳しい外出制限が始まると、最寄りのスーパーへの買い出しも各世帯につき 3 日に 1 回のみ可能という状況になった。隔離生活による疲れが溜まってきた頃には、調査協力者のご家族の配慮で、写真 2 のような羊肉のごちそうを用意してくださったり、マージャンを楽しんだりと、筆者が無事に帰路に着けるまで本当に親切に接してくださった。その暖かさには今でもなお心から感謝している。

写真 1. お正月のテーブルの盛り付け[3]

写真 2. 羊の丸茹で

2 月 9 日には居住地区ごとに写真 3 に示す通行証が発行され、人員管理が徹底されるようになった。筆者は当該地区の住民ではないため、臨時滞在者用の通行証である。中国の身分証番号を持たない外国人に対しては、警察から何度も情報確認の電話が入り、非常事態であることを実感させられる日々であった。スーパーでは特に消毒用アルコールや使い捨てマスクの品薄状態が続いていたため、なんとか入手できた物資を少しずつ消費していた。本来は 1 週間の滞在を予定していたところを 1 か月近く滞在することになったため、食料品だけでなく生活用品のほとんどを現地で入手しなければならない状況にあったのには苦労した。そうした中で、調査協力者の方々がその都度温かく接してくださったことが強く印象に残っている。

[3] 乳製品、果物、ナッツ、キャンディ、焼き菓子などが綺麗に盛り付けられている。

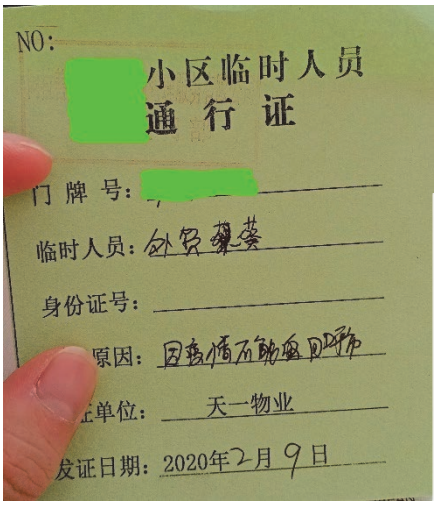

写真 3. アラシャー盟滞在時の通行証

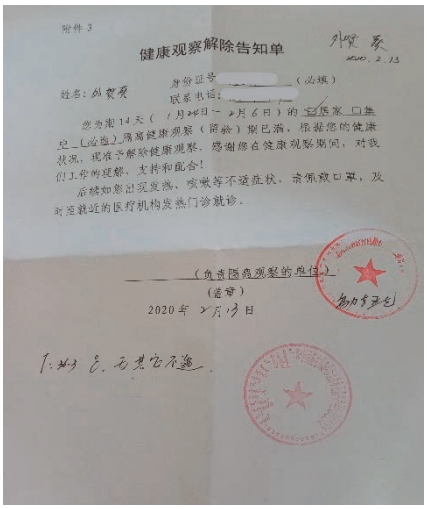

写真 4. 健康観察解除の通知書

当初の予定ではアラシャー左旗から航路でフフホトの大学寮へ戻るつもりであった。しかし当時は、新型コロナの影響によって、アラシャー左旗発フフホト行きの航空便も欠航が相次いでおり、延期して再度予約を試みても欠航となった。2 月 13 日には 14 日間の自宅隔離を行ったことの証明書（写真 4）をアラシャーの「社区卫生服务中心[4]」で入手し、フフホトを経由し日本へ戻る帰路に着く準備を整えた。2 月 19 日のアラシャー左旗発フフホト行きの航空便を予約し直した頃、内モンゴル大学の留学生担当の先生から、呆然とする連絡を受けた。その当時、筆者の住んでいる留学生寮がある内モンゴル大学北キャンパス[5]は完全に封鎖されており、学生寮はおろかキャンパス構内にさえ一歩も入ることができない状況にあること、フフホトの宿泊施設が全て休業していること、居住地区を出入りするにはその地区の住民であることを示す必要があるということなどを知らされた。それはつまり、大学の寮の部屋に戻ることも、ホテルに泊まることも、知人宅を頼りにすることもできないため、フフホトへ戻ったとしても路頭に迷うことになるということであった。当時の筆者に残されていた唯一の選択肢は、帰国を本来の 8 月から半年前倒してそのままアラシャーからフフホト経由で日本へ直接帰国することであった。元々アラシャー盟での滞在は 1 週間の予定だったため、当時の持ち物は、必要最低限の衣服と宿泊用品、調査に用いるパソコン、録音器具、ノート、筆記用具などを詰めた大き

[4] 居住地区ごとに設置された、保健所および保健センターの機能を有する、保健衛生に関する総合的なサービスを提供する機関。

[5] 内モンゴル大学には 3 つのキャンパスがある。北部に位置する北キャンパス（本部キャンパス）、北キャンパスから東に約 550m の位置にある東キャンパス、北キャンパスから南に約 6km の位置にある南キャンパスである。筆者の居住していた国際教育学院の留学生寮、および 2021 年 5 月 20 日以降居住している教職員住宅があるのはいずれも北キャンパスである。3 節で述べるが、筆者が教師として所属する日本語学部があるのは南キャンパスである。

めのリュックサック 1 つと手提げかばん 1 つであった。日本用の財布も日本の実家の鍵も、寮の部屋に置いてきており携帯していない中で、突然帰国と言われた際は非常に狼狽した。結局、寮の部屋に荷物の大部分を残したまま、帰国することを余儀なくされた。ただ幸いにも、内モンゴル大学の先生方のご配慮と学生寮に隔離中の友人の協力により、貴重品や最低限の荷物を詰めたスーツケース 1 つと、先生のご厚意による水と軽食をフフホトの空港で受け渡してもらうことができたため、最悪の事態は免れることとなった。空港では防護服を着た医療スタッフが徹底した消毒を行っており、列に並ぶ際前後 1m は間隔を空けるようにとの指示を記した警戒線（写真 5）が引かれていたことに驚いた。その後、フフホトの空港の外へは一歩も出ることなく、フフホト発—北京経由—関西空港着の便で、2 月 20 日に無事に帰国した。気が張り詰めていた非常事態の生活から一転、日本帰国時の関西空港ではコロナ禍以前の対応であり、到着時に拍子抜けしてどっと疲れを覚えたことは今でも印象深い。

ちなみに、コロナ禍の影響で日程変更を余儀なくされた航空便のキャンセル料の支払いに関して、留学期間中に加入していた日本の海外旅行保険会社に連絡し、コロナ禍によって生じた経済的負担に保険が適用できないか尋ねたものの、日本では新型コロナについて殆ど認知もされていない時期であったために、全く取り扱ってもらえなかったのは残念であった。

写真 5. コロナ禍以後に引かれた警戒線

３．日本語教師としてフフホト市に滞在したコロナ禍 2〜3 年目：2021 年 4 月 28 日〜2023 年 1 月現在

３．１．日本からフフホト市への渡航：2021 年 4 月 28 日〜2021 年 5 月 20 日

３．１．１．渡航の背景

日本へ帰国後、半年間のオンライン留学を経た後、2021 年 5 月から内モンゴル大学日本語学部の外国人講師として赴任することになり、フフホトへ戻る機会を得た。フフホトでの滞在を強く望んだ主たる理由としては、博士論文執筆のための調査データが不十分であったことが挙げられる。現地調査データなしには論文執筆が極めて難しいため、調査地により近く、一部のアラシャー方言話者も居

住しているフフホトに滞在することは、日本にいるよりもはるかに有利な環境にあると考えたのである。学生として滞在することも考えたが、当時は留学ビザが全く取得できない状況にあったため断念した。一方、就労ビザは条件が揃えば取得が可能であったことや、内モンゴル大学在学時の縁があったこと、さらに内モンゴル大学の学生寮に置いてこざるを得なかった荷物を回収しに戻りたいという気持ちも後押しして、内モンゴル大学日本語学部の外国人講師として、幸運にもフフホトへ戻る機会を得たのである。

３．１．２．渡航の事前準備

事前準備においてコロナ禍の影響を受けた点としては、まずビザ取得時に、従来は就労ビザには必要でなかった中国の行政機関が発行する招聘状が必要になった点が挙げられる。内モンゴル大学が発行する招聘状ではなく、内モンゴル自治区が発行する招聘状が必要であった。しかし、筆者にとってはもちろん、受け入れ先の大学にとっても初めての手続きであったために、最初に送られてきたのは大学発行の招聘状であった。その招聘状を持ってビザセンターに赴くも窓口では一蹴されてしまった。そのため、ビザ申請窓口での掲示の写真とともに、再度内モンゴル大学の担当者に自治区発行の招聘状が必要だということを連絡し直した。招聘状関連の手続きだけでも 2 ヶ月程度という長い時間を要し、結局ビザの取得ができたのはビザ申請準備を始めてから約半年後であった。

また渡航直前の準備として、事前検査（PCR 検査と抗原抗体検査）およびダブル陰性証明書作成にかかる費用の 4 万円を自己負担しなければならなかったことは経済的に大きな負担であった。航空券に関しては、2021 年 4 月 27 日関西空港発→青島経由（4 月 28 日着）→フフホト着（5 月 12 日着）で 24 万 2520 円であった。筆者の場合、幸いにも内モンゴル大学が航空券代を全額負担してくれたが、コロナ禍以前、日本―フフホト間の航空券代が往復でも 5〜6 万円程度だったことを踏まえると非常に高額であることが分かる。

３．１．３．入国手続き及びホテルでの隔離生活

入国時の手続きに関するコロナ禍以後の変更点としては、空港での PCR 検査（鼻腔）、消毒、健康管理アプリの登録と、ホテルでの隔離が挙げられる。筆者の場合は、青島のホテルで 2 週間、フフホトのホテルで 1 週間、合計 3 週間の隔離であった。青島の隔離施設への移動手段は大型バスであった。移動前の空港の待機場所でも、移動中のバスの中でも行き先が事前に伝えられなかった点には不安を覚えたが、消毒も徹底されており、青島の隔離ホテルには日本語通訳の方もいたため、隔離期間の対応は手厚いものだと感じた。ホテルスタッフとの主な連絡手段は Wechat のグループチャットであり、毎日の体温報告（午前 1 回、午後 1 回の計 2 回）や、3 日目の PCR 検査（鼻腔）、7 日目の PCR 検査（鼻腔）および血清抗体検査、13 日目の PCR 検査（鼻腔、口腔）および血清抗体検査などの検

査連絡や食事のアレルギーなどの重要連絡も全てグループチャット上で行われた。Wechat が使えない年配の方には十分な連絡が行き届かず、非常に苦しい思いをされた方もいた。新型コロナ対策規定によって、洗濯サービスとエアコンの使用が禁止されていたが、タオルは最低限必要な枚数があり、空気清浄機が常時稼働していた。部屋のドアを開けることも、ベランダのドアを開けることもできなかった。しかし、青島のホテルは郊外にあり、部屋の広さも十分あったので、静かな環境の中で比較的快適に過ごせた。隔離期間中の唯一の楽しみであった食事に関しては、予想以上に品数豊富で、満足できる内容だった（写真 6, 7, 8 参照）。

写真 6. 青島隔離時の朝食例

写真 7. 青島隔離時の昼食例

写真 8. 青島隔離時の夕食例

2021 年 5 月 12 日の朝、14 日間の各検査と健康観察終了の証明書を受け取り、大型バスで青島の空港へ向かい、昼頃に到着した。到着後はすぐに隔離終了者用に設置された特設ルートを通るように案内されて空港の特設受付に行き、ホテル退出時に受け取った証明書の内容確認と預け荷物の手続きを行った。その後、隔離者専用の待機室で 17:05 発のフフホト行きの便の搭乗案内のアナウンスを待った。待機室ではインスタント麺などの軽食を有料で注文したり、最寄りのコンビニで必要なものを買うことが許可されていた。そのため、簡単に昼食を済ませる人や、家族や勤務先などに当時の状況を連絡している人が多かったように思う。飛行機が遅延するというトラブルはあったが、無事に搭乗することができた。

機内では、国内移動の隔離不要者はマスクを着けて 1 席ずつ空けて前方に座っており、筆者のような隔離必要者は隔離不要者の最後列から 3 列空けて座るように指示された。当時、その機内の隔離必要者は 1 人だったため、筆者が 1 人だけ特別扱いされ優遇されていると勘違いした乗客も中にはいたようで、3 列空けてある座席や、筆者の近くの座席に移動する乗客がいたが、キャビンアテンダントに怒鳴り声が混じるほどに厳しく注意されていた。

フフホトの空港に到着後、健康管理アプリでの登録を促す案内はあったものの、国内線であったため、他の隔離不要者と同様に、荷物の受取りや空港出口までのルートはスムーズに進むことができた。出口を出る際に、スタッフに事情を説明すると、空港併設の看護室に案内され、証明書類の確認と PCR 検査（鼻腔）を行った。その後、救急車に乗るようにと指示をされ、空港から車で 30 分ほどの距離

にある隔離ホテルへ向かった。バスやタクシーではなく、救急車で隔離施設まで移動するとは考えても見なかったため非常に驚いた。海外で、急病人の送迎の場合と同様にかなりのスピードで、サイレンを鳴らしながら赤信号もするすると通り抜けていく救急車に乗れたことは貴重な経験になった。青島の隔離ホテルへ移送される際と同様に、行き先のホテルを事前には知らされていなかったため、長時間移動になったらどうしよう、見知らぬ辺鄙なところへ連れていかれたらどうしようといった不安はあったが、途中で内モンゴル大学付近の見慣れた景色を目にしてからはひと安心し、結局 20 分ほどでホテルに到着した。

2021 年 5 月 13 日 0 時頃にホテルに到着し、玄関で手指と荷物の消毒を行い、Wechat のホテルスタッフのアカウントの QR コードを読み取った後、部屋に案内された。フフホトでの隔離期間は 2021 年 5 月 13 日 0 時から 5 月 20 日 0 時の 7 日間であり、毎日の体温報告（午前 1 回、午後 1 回の計 2 回）や 7 日目の PCR 検査（鼻腔）の連絡、補充が必要な物の連絡、宿泊費用の支払いまで、全て Wechat 上で行われた。新型コロナ対策規定によって、洗濯サービス、エアコンの使用、タオル交換サービスのいずれも禁止されており、部屋のドアを開けることもできなかったが、換気のために窓を開けることはできた。そのため、1 日に数回空気の交換を行っていた。青島のホテルとは異なり、街中にあるホテルだったため、日中から深夜まで車のクラクションの音がよく聞こえた。部屋の広さは青島のホテルと比べると狭かったが、1 人で十分に過ごせる広さであり、体調を維持したまま過ごすことができた。ただし、テレビが映らない、Wi-Fi が非常に不安定であるといったトラブルはあった。食事に関しては、毎日朝食に牛乳あるいはヨーグルトの乳製品が付いており、昼食と夕食には肉の入ったおかずが必ず含まれていたため、モンゴルらしさを感じる内容であった（写真 9, 10 参照）。

写真 9. フフホト隔離時の朝食例[6]

写真 10. フフホト隔離時の昼食例[7]

[6] 写真 9 の右側に映っているものが紙パック入りの牛乳である。この朝食には、プラスチックトレーの上にある、ゆで卵も付いていた。
[7] 写真 10 の左側に映っているように、オレンジなどの果物が付いていることも多かった。

5 月 20 日午前 8 時に Wechat でホテルスタッフから退室許可の連絡があり、タクシーで内モンゴル大学の事務補佐員の方に迎えに来てもらった。タクシーで大学へ向かう際に、まずビザ手続きのための健康診断センターに寄った。1 時間ほどで健康診断を終えると、同じタクシーで内モンゴル大学へ向かい、無事に教員アパートへ到着した。荷ほどきをする前に、大学最寄りの携帯ショップへ行き、新たに携帯番号を入手した。外国人が携帯番号を入手する場合、パスポートの提示と初期チャージ費用の支払いを済ませればすぐに手続きが済んだ。教員アパートへ入った後も 7 日間の健康観察と外出自粛をするようにとの指示があった。そのため、最低限の食料品と日用品を調達する時以外は外出を控えて過ごした。

隔離期間にかかったホテル代[8]は次の通りである。

- 青島　　:〔宿泊代・食事代〕1 泊 500 人民元×14 日間=7000 人民元
  ※2021 年 5 月 12 日のレートである 1 人民元＝16.870 円で換算した場合、
  7000 人民元≒11 万 8090 円。

- フフホト　:〔宿泊代〕329 人民元×8 日間＋〔食事代〕1 日 100 人民元×7 日間＝3332 人民元
  ※2021 年 5 月 19 日のレートである 1 人民元＝16.961 円で換算した場合、
  3332 人民元≒5 万 6514 円。

飛行機代 24 万 2520 円と 3 週間の隔離ホテル代 17 万 4604 円とを合計すると 41 万 7124 円となり、非常に経済的にも負担がかかる金額である。筆者の場合は、就労目的で渡航しており、幸いにも勤務先に飛行機代と隔離ホテル代を手続き後に支払ってもらうことができた。とはいえ、コロナ禍での渡航にかかるビザ申請のための必要書類作成費用や各種検査費用などについては全て自腹を切らねばならなかった。そのため、コロナ禍の渡航における経済的負担は非常に大きいと感じた。なお、筆者より 6 か月遅れて、2021 年 10 月下旬に日本を出発し、11 月 5 日にフフホトに就労ビザで渡航した日本国籍の友人の話によれば、経由地での 2 週間の隔離に加えて、フフホトでも 2 週間隔離生活を送らなければならなかったという。

隔離期間を含む渡航期間に実施された PCR 検査は鼻腔のみ、あるいは鼻腔と口腔の両方で行われる方式であった。検査後に激しくむせたり、アレルギー反応でくしゃみや鼻水がしばらく止まらないほどに痛みや不快感を伴うものであった。日本で受けた PCR 検査は痛みを覚えるようなものではなく、フフホトでの滞在が始まってから受けた PCR 検査も多少むせることはあっても痛みや不快感を

[8] 中国人民元から日本円への換算には、https://www.kawase365.jp/ を参照した（最終閲覧日：2022 年 11 月 1 日）。

それほど伴うものではなかった。PCR 検査の厳しさからも、渡航者の入国時には徹底した厳戒態勢が敷かれていたことがうかがえるように思う。

３．２．日本の新型コロナ対策との違いを肌で感じた、1 度目のロックダウン以前の生活：2021 年 5 月 20 日～2022 年 2 月上旬

まず中国内モンゴル自治区フフホト市での滞在の第一印象として、日本での新型コロナ対応と比べて、全てが非常に厳しく管理されていると感じた。公共交通機関、飲食店、ショッピングモール、スーパー、コンビニ等、移動時にはその都度、検温と健康コードの提示が求められる。健康コードは地域ごとに独自のアプリによって管理されており、フフホト市の場合は、「青城码」というアプリが用いられている。ただ、このアプリでは中国国籍の身分証を持たない外国人の場合、健康コードが表示されず、PCR 検査の結果やワクチン接種証明といった情報も反映されない[9]ため、筆者のような外国人にとっては非常に厄介である（写真 11）。2021 年秋頃に外国人専用の健康コード（写真 12,13）とこのアプリが連携されるようになったが、表示される健康コードは「青城码」の健康コードではないため、スキャナーでは反応せず、公共交通機関、飲食店、ショッピングモール、スーパー、コンビニ等を利用する際にはその都度事情を説明して警備員や店員と交渉しなければならなかった。健康コードとは別の「行程卡」というアプリで提示する行程コードは外国人でも問題なく使うことができた。コロナ禍の状況が落ち着いており、健康コードの提示が厳しくは求められない時期には、行程コードを提示するだけで入店・通過できる場合もあった。コロナ禍の状況が少しでも悪くなれば、行程コードを提示しても全く受け付けられず、健康コードを厳しくチェックされるという状況になった。新規陽性者数が 0 人である状態が長期間続き、コロナ禍の影響がほとんどなくなっていた時期には、入店時の健康チェックも形骸化し、検温も健康コードの提示も必要なくなっていたが、濃厚接触者が 1 人でも確認された場合はキャンパス封鎖、新規陽性者が 1 人でも確認されれば即時にその地区が封鎖、また市中感染が確認された場合はすぐさま全域の一斉 PCR 検査や都市封鎖が行われる。そのため、油断は禁物である。

健康コードの他にも、外国人にとって不便だと感じていたことと言えば、PCR 検査の結果が電子媒体では確認できなかったということが挙げられる。2022 年 9 月下旬以前は結果が確認できないままになるか、紙媒体で発行される結果報告書を受け取りに行かなければならなかった。病院で PCR 検査を受ける場合は、Wechat 上の各病院の公式アカウントで事前予約が必要な場合もあるが、中国籍の身分証番号がなければアプリに登録できないために予約もできないといった問題が生じることもあ

[9] 2 度目のロックダウン禍である 2022 年 11 月 17 日に確認したところ、健康コードおよびワクチン接種の情報は依然として反映されないが、PCR 検査の結果については、過去 1 週間以内に限り、表示されるようになっていた。

った。コロナ禍関連のアプリだけでなく、ネットショッピングや交通機関のチケット予約のアプリ等に関しても、中国籍の身分証番号がなければ登録できず、その先に進めないというトラブルはしばしば生じることだ。いつも面倒だと感じることでもある。しかし、フフホトに滞在している外国人はコロナ禍以降非常に減少しており、コロナ禍以前から一時帰国せずに滞在を続けている一部の留学生と、就労ビザを取得できた者のみに限られるため、外国人向けの対応が遅れることは仕方がないことであるとも思う。

写真 11.　筆者の「青城码」のホーム画面

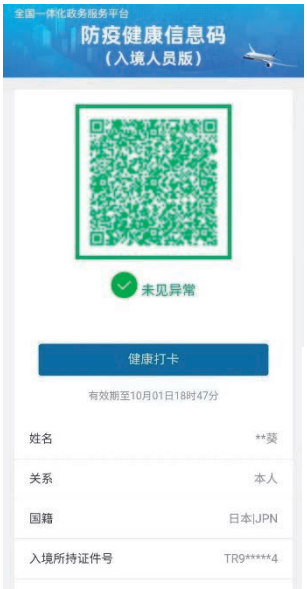

写真 12.　外国人用健康コード（中国語版）

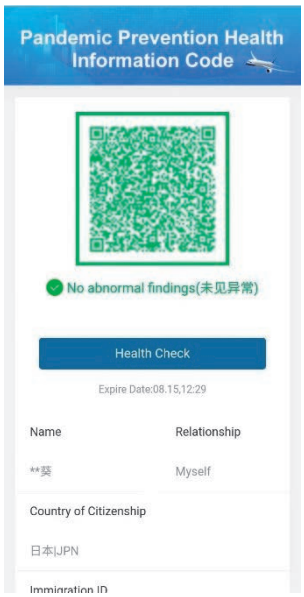

写真 13.　外国人用健康コード（英語版）

ワクチンに関しては、筆者の場合、2021 年 11 月 30 日と 2022 年 1 月 19 日の 2 回、中国でいずれも Sinovac 製のワクチンを接種した。外国人が接種する場合は自己負担で、1 回につき 130 元であった。外国人が打てる日[10]は決まっており、Wechat のグループチャットで連絡を受け、指定された日時、場所に行けば、打つことができ、その場で紙媒体の接種証明書（写真 14）を受け取ることができた。2 回は打つことを強く推奨されたが、3 回目は 2 回目接種の後、半年の期間が空いていれば打つこと

[10] フフホト市における外国人向けのワクチン接種に関しては、通算 10 回目の会場設置となった 2022 年 7 月 6 日までは、概ね 2 ヶ月に 1 回の頻度で指定されていた。しかし 11 回目の接種日として指定されたのは 2023 年 1 月 13 日であり、約半年ぶりの再開であった。これだけの期間が空いての再開となったのには、3 回目以降のワクチン接種には 6 か月以上の期間を空ける必要があることだけでなく、やはり 2 度のロックダウン下における徹底した感染対策が影響しているものと思われる。

ができるが、任意であり、2 回目までとは違い強く推奨する連絡は受けていない。

预防接种凭证

（Vaccination Certificate）

受种者编码 Code [redacted]　身份证号 ID [redacted]

受种者姓名 Name GEKA AOI　出生日期 Date of birth [redacted]

性别 Gender 女　联系电话 Mobile phone [redacted]

家庭住址 Current Address 呼和浩特市赛罕区大学西路办事处大西防保站内蒙古大学家属楼

序号 NO	疫苗名称 Vaccine	剂次 Dose	接种日期 Date	疫苗批号 Lot#	生产企业 Manufacturer	接种单位 Clinic
1	新冠疫苗	1	2021-11-30	202107118Y	北京科兴中维	内蒙古自治区疾病预防控制中心门诊部
2	新冠疫苗	2	2022-01-19	202107116Y	北京科兴中维	内蒙古自治区疾病预防控制中心门诊部
3						
4						
5						

此凭证请受种者妥善保存，以备查验。

归属单位 Attribution Unit：

接种单位 Clinic：内蒙古自治区疾病预防控制中心门诊部

经办人盖章：

写真 14.　筆者のワクチン接種証明書

３．３．若干の自由があったフフホト市での 1 度目のロックダウン：2022 年 2 月下旬～3 月下旬

2022 年 2 月 15 日から 16 日にかけて、フフホト市でデルタ変異株での陽性者が 3 例確認されたことを皮切りに、全域 PCR 検査が行われ、重症化リスクの高いとされるデルタ株の市中感染による感染拡大であることが明らかとなった。素早い対応が採られ、厳しい外出制限によって徹底的な封じ込めが行われた。筆者の勤務している内モンゴル大学では、2 月 21 日～6 月 10 日までの春学期の授業が全面的にオンラインで行われることが 2 月 18 日までには決定し、学生は帰省先から大学へ戻ることなくオンライン授業を受けることになった。全域 PCR 検査は 2 月 18 日から 3 月 4 日までの間に計 14 回（いずれも口腔のみ）実施され、2 月下旬には 60 人を超える新規の症状あり確定感染者が確認される日もあったものの、新規症状あり確定感染者数が 20~30 人前後の期間が約 1 週間続いた後、2 月末には 10 人前後、3 月 3 日には 9 人、3 月 4 日には 0 人と順調に減少し、全域 PCR 検査も終了した。2 月 23 日の 5 回目の PCR 検査時から 3 月 4 日の 14 回目の PCR 検査時まで、検査を受けたことを証明するためのシール（写真 15）が配布された。2 月下旬以降、約 1 ヶ月間は、飲食店やショッピングモールは軒並み休業し、人が集まるイベントや宴会等は全面的に禁止となり、一部のスーパーや

コンビニが営業するのみという状況であった。スーパーのデリバリーサービスや、ネットショッピングの購入品の受取りについて制限はあったが、ある程度は可能であり、キャンパスの外への買い出しも可能であった。ただし、スーパーやコンビニで買い物する際の入店時の健康チェックは非常に厳しくなっており、検温、健康コードの提示に加え、当日の PCR 検査を受けたことを証明するシールの提示も必要となっていた。3 月初旬には通行証（写真 16）が配布され、キャンパスを出入りする際には健康コードと通行証の提示が求められた。3 月下旬には、飲食店も徐々に再開し始め、街が活気を取り戻していったが、大規模な移動で感染が拡大することを予防するためか、学生達が学期中に大学に戻ってこれることはなく、引き続きオンライン授業が続いた。6 月下旬に対面での春学期の期末試験が予定されていたが、コロナ禍の影響で延期となり、秋学期の前に行うという異例の対応となった。内モンゴル大学では期末試験を必ず対面で行うという方針になっていたため延期となったが、フフホト市内の大学でも、大学によっては、オンラインで期末試験を行うところもあり、それぞれの対応は各大学に任せられていたようである。フフホト滞在中の初めての厳しい外出制限だったが、一度陽性であると診断されると、直近 2 週間の行動履歴がサイト上で全て公開され、陽性者が訪れていた施設やお店はすぐに休業となるという徹底的な封じ込め対策には非常に驚かされ、当時は特に消毒に神経質になっていた。

写真 15.　PCR 検査受診証明シール

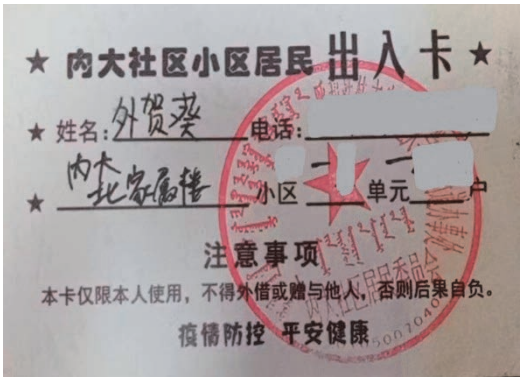

写真 16.　キャンパス出入り用の通行証①

３．４．一切の自由が奪われたフフホト市での 2 度目のロックダウン：2022 年 8 月 1 日～2023 年 1 月現在

先述したように、筆者の勤務している内モンゴル大学では、2 月 21 日～6 月 10 日までの春学期の授業が全面的にオンラインで行われ、学期末になってもコロナ禍の影響で学生が大学に戻って来ることができなかった。そのため、春学期の期末試験が 9 月から始まる秋学期の最初に延期されることになっていた。また夏期休暇中には、8 月 15 日からの 1 週間、夏季強化授業が対面で行われる予定であ

り、8 月 15 日に向けて学生達が一斉に大学へ戻ってきていた。しかし、8 月 13 日に日本語学部のある南キャンパスの学生の中に飛行機内で濃厚接触者となった学生がいることが分かると、同日南キャンパスが封鎖された。この影響を受け、強化授業は対面実施からオンライン実施へと変更となり、対面実施しか認められていない期末試験は再延期されることとなった。8 月に大学構内の各キャンパスで実施された個人対象の一斉 PCR 検査は、8 月 11 日、15 日、20 日、22 日、25 日、31 日の計 6 回（いずれも口腔のみ）であり、これらの検査の結果、安全が確認されたため、8 月末〜9 月上旬に対面で期末試験が実施された。学生達と半年以上ぶりに直接会うことができ、非常に喜ばしかった。

春学期期末試験の再延期の影響を受けて、秋学期の開始時期も延期となっていたが、定期的な PCR 検査の実施によって安全を確認しつつ、9 月 12 日から無事に対面で新学期を迎えることができた。教室も食堂も活気にあふれ賑やかで、定期的な PCR 検査があること以外は通常通りの学校生活が始まっていた。9 月に大学構内の各キャンパスで実施された一斉 PCR 検査は、9 月 2 日、6 日か 7 日のうち 1 回、13 日〜16 日までのうち 1 回、19〜23 日までのうち 1 回、26 日、29 日の計 6 回（いずれも口腔のみ）であった。筆者の場合、9 月末以降は居住地区ごとに実施される PCR 検査を受けることになった。

３．４．１．2 度目のロックダウンの第一波

2022 年 9 月 28 日にフフホト市でオミクロン変異株での陽性者が 1 例確認されたことを皮切りに、全域 PCR 検査が行われ、市中感染が明らかとなった。今回は感染力の強いオミクロン変異株による市中感染であったため、その感染力および制限の厳しさはフフホト市では経験したことのない凄まじいものとなった。フフホトにおける新規感染者数の推移は図 2 および表 2 に示すとおりである[11]。10 月初旬には、フフホト市が中国大陸において最も陽性者数の多い都市として連日報道がなされ、国慶節の休暇期間をロックダウン禍で過ごすこととなった。2022 年 10 月 31 日時点で、内モンゴル自治区における新規感染者数は、症状あり確定感染者の最大数が 10 月 7 日の 226 例、無症状感染者の最大数は 10 月 6 日の 651 例であった。10 月 15 日以降は症状あり確定感染者が 5〜10 例前後、無症状感染者が 50〜100 例前後を推移するという状況に落ち着いていた。

まず授業であるが、9 月 29 日以降オンライン授業に切り替えとなった。対面授業が始まってから、たった 2 週間が過ぎたばかりでの切り替えととなり、非常に残念だった。オンライン授業化の連絡があると同時に、大学の管理下で学生、教職員、学内の食堂で勤務する従業員などを対象に実施されていた一斉 PCR 検査が、今後は居住地区の管理下で行われるようになるとの連絡も受けた。

---

[11] 「新型冠状病毒肺炎疫情地图」（https://mr.baidu.com/r/QnSIQR815S?f=cp&u=67f440a3f4fd86c1）のデータに基づいて筆者が作成（最終閲覧日：2022 年 12 月 7 日）。

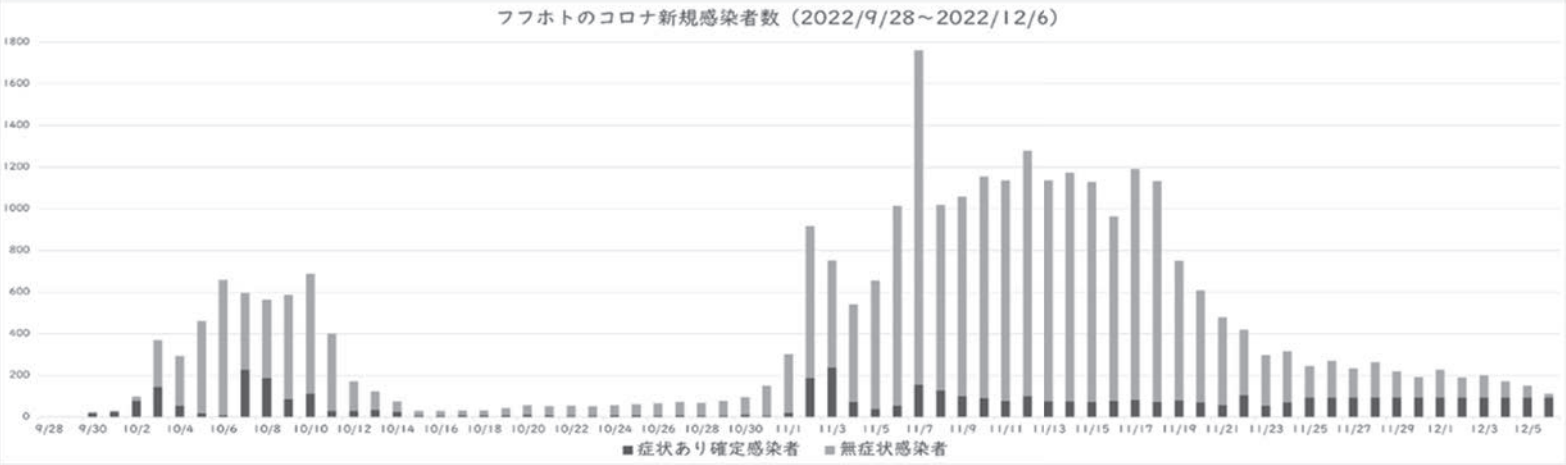

図2. フフホトのコロナ新規感染者数（2022/9/28～2022/12/6）

表2. フフホトのコロナ新規感染者数（2022/9/28～2022/12/6）

	9/28	9/29	9/30	10/1	10/2	10/3	10/4	10/5	10/6	10/7	10/8	10/9	10/10	10/11	10/12	10/13	10/14	10/15	10/16	10/17	10/18	10/19	10/20	10/21
症状あり確定感染者	1	1	17	25	77	144	54	19	8	226	188	87	113	28	28	35	23	5	6	9	8	9	11	8
無症状感染者	0	0	6	5	21	225	239	441	651	371	376	499	574	374	144	89	53	23	23	22	24	34	45	44
合計	1	1	23	30	98	369	293	460	659	597	564	586	687	402	172	124	76	28	29	31	32	43	56	52

	10/22	10/23	10/24	10/25	10/26	10/27	10/28	10/29	10/30	10/31	11/1	11/2	11/3	11/4	11/5	11/6	11/7	11/8	11/9	11/10	11/11	11/12	11/13	11/14
症状あり確定感染者	6	7	8	9	6	8	5	7	10	7	20	188	238	72	39	55	156	129	101	91	79	101	75	76
無症状感染者	48	46	49	53	59	64	62	71	85	144	283	730	514	469	618	958	1604	891	956	1063	1056	1177	1061	1096
合計	54	53	57	62	65	72	67	78	95	151	303	918	752	541	657	1013	1760	1020	1057	1154	1135	1278	1136	1172

	11/15	11/16	11/17	11/18	11/19	11/20	11/21	11/22	11/23	11/24	11/25	11/26	11/27	11/28	11/29	11/30	12/1	12/2	12/3	12/4	12/5	12/6
症状あり確定感染者	73	77	81	73	80	71	58	105	55	71	94	66	66	53	68	66	51	66	40	54	37	67
無症状感染者	1057	888	1111	1060	670	536	422	315	243	244	152	176	139	169	125	99	133	96	107	79	56	18
合計	1130	965	1192	1133	750	607	480	420	298	315	246	242	205	222	193	165	184	162	147	133	93	85

筆者の居住している内モンゴル大学北キャンパス構内の団地は、3 段階で設定されている危険度レベル[12]が最も低い低リスク地区ではあるものの、9 月 29 日以降 10 月 31 日時点まで、外出制限が日に日に強くなり完全閉鎖が解かれる兆しも見えない状況であった。9 月 29 日～10 月 31 日までに居住地区の管理下で実施された PCR 検査は、9 月 29 日、30 日、10 月 1 日、2 日、3 日、4 日、5 日、6 日、7 日、8 日、9 日、12 日、15 日、17 日、25 日、27 日、30 日の計 17 回（いずれも口腔のみ）である。同じく 9 月 29 日～10 月 31 日までに居住地区の管理下で実施された抗原検査は、10 月 18 日、19 日、21 日、22 日、25 日、27 日の計 6 回である。10 月 25 日と 27 日には、午前に抗原検査、午後に PCR 検査が行われた。以前までと異なり、今回、居住地区の管理下で実施された PCR 検査では、外国籍の者でも中国籍の人と同じウェブサイトで遅くとも翌日中には検査結果を確認できた[13]ため、その点は数少ない良かったことの一つである。

9 月 29 日、30 日にはスーパーやコンビニ、飲食店での入店時の健康チェックが厳しくなり、検温と健康コードの提示が徹底されるようになった。ネットショッピングで購入した宅配物が届かなくなったり、発送されなくなったりしたのもこの頃である。

10 月 1 日には、飲食店やデリバリーサービスを行うお店の休業が目立つようになった。スーパー、コンビニでの入店時の健康チェックはさらに厳しいものになり、検温と健康コードの提示の他、2 週間以内の PCR 検査結果の提示も必要とされた。特に外国籍の場合は、健康コードが中国籍の人と同じようには提示されないため、説明に時間を要したが、PCR 検査結果は同じように提示できたため、一定の苦労は要したものの無事に入店の許可が下り、買い物をすることができた。

10 月 2 日には、最寄りの出入り口のシャッターが閉められ封鎖となった。これにより、キャンパスを出入りできる場所が東門の 1 か所に制限された。

10 月 3 日には、キャンパスを出入りする際に提示する通行証（写真 17,18）が発行された。

写真 17.　キャンパス出入り用の通行証②（表面）写真 18.　キャンパス出入り用の通行証②（裏面）

[12] 危険度レベルの段階は、11 月 11 日までは高中低の 3 段階で設定されていたが、11 月 12 日以降は高低の 2 段階の設定となった。危険度レベルの 2 段階化については 3.4.2.節も参照されたい。
[13] 外国人がこの Web サイトで PCR 検査の結果を確認することができたのは、2022 年 9 月下旬から 11 月 16 日までである。11 月 17 日以降の状況については 3.4.2.節を参照されたい。

この日以降、キャンパス外への外出は 1 家庭 1 日 1 回 1 人までという制限が付くようになった。デリバリー対応の飲食店はほとんどなくなり、配達員の数も非常に少なくなっていたため、以前は予定時間の 10 分前までには届いていたデリバリーが予定時間を 2,3 時間過ぎても届かないといった状況になった。オンライン授業は行われているものの、南キャンパスにいる学生達も毎日午前中の指定された時間に一斉検査場で PCR 検査を受けなければならず、遅刻や欠席をせざるを得ない学生もおり、授業にも大きく影響が出るようになった。

10 月 6 日には、北キャンパスが完全封鎖となった。唯一出入りが可能であった東門も封鎖され、完全にキャンパスの出入りが禁じられた。これにより、3 日前に発行されたばかりの通行証も意味をなさなくなり、居住地区内に封じ込められることとなった。食料品と日用品の調達ができる場所は、キャンパス内の小さな売店のみとなり、その日のうちに瞬く間に品薄状態となった。コロナ禍の状況は悪化する一方であったため、仕入れ回数の制限も強くなって仕入れが困難になり、品薄状態に拍車がかかった。売店での買い物と PCR 検査以外の外出は禁じられ、居住地区内における買い物後の軽い散歩なども極力控えるようにとの指示があった。

10 月 10 日には、南キャンパスで症状あり確定感染者が確認されたため、南キャンパスにおいて、キャンパスへの出入りはもちろん、学生寮も完全封鎖となった。学生は寮の部屋から 1 歩も出られない状況となり、オンライン授業の際に会話していても暗い話題ばかりで、非常に痛ましかった。

10 月 16 日、筆者の居住しているアパートの同じ棟、同じユニット[14]において症状あり確定感染者が確認されたため、筆者の置かれている状況は更に悪化した。突然防護服を着たスタッフの方が自宅を訪れ、玄関のドアをノックしたかと思うと外出禁止のシールがドアに貼付され、玄関のドアを開けないようにとの指示を受けた。これにより自宅からの一切の外出が禁止となった。事前連絡がないままに、玄関から 1 歩も出られなくなり、非常に混乱した。生活物資をキャンパス内の売店に買いに行くことも許されなかったためパニック状態に陥りかけたが、とりあえず手当たり次第に情報収集に努めた。午後には売店の営業をしている店主の方も玄関から出られない状況になっており、やむを得ず営業停止となっていることや、筆者の居住している棟以外の棟では、シールがいきなり貼付されることも部屋からの外出禁止という連絡もされていないということが分かった。夕方になると、工事音が聞こえるようになり、窓の外を見ると、筆者の居住している棟を取り囲むように塀が設置されていた。10 月 15 日までは一斉検査場で列に並んで行っていた PCR 検査も、筆者の居住棟の住民は 16 日以降、各部屋をスタッフの方が回って玄関で検査を受けるようになり、初めて抗原検査が行われるようにもなった。抗原検査は、各自が検査キット（写真 19）を用いて行うもので、15 分以内に結果（写真 20）が分かるものである。鼻の奥に綿棒を入れて検査するのだが、アレルギー反応が出やすい体質の筆者には非常に辛い検査であった。

---

[14] 中国語で「単元」。集合住宅において、1 つの階段を共有するまとまりを指す。

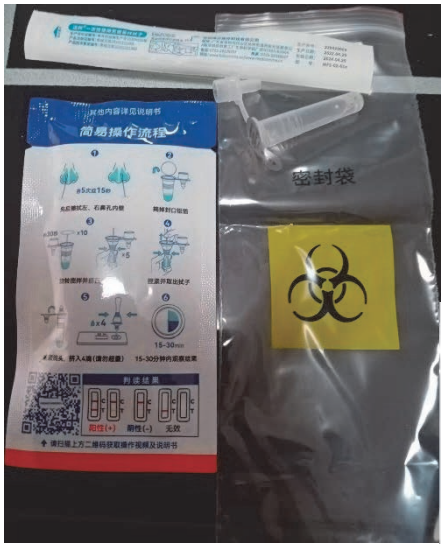

写真 19.　抗原検査キット

写真 20.　抗原検査結果（陰性）

封鎖生活における生活物資の無料支給はなく、全て自力で調達しなければならないため、暇があればスマホで新しい情報が出ていないかどうかを確認せざるを得ない状況に追い込まれた。スーパーやコンビニも全店休業状態であったため、個人経営の事業主から WeChat のグループチャットを通じて注文することしかできない状況であった。注文が殺到しすぎると配送トラブルも多くなり、頼んでいたものが届かなかったり、一方的にキャンセルされたり、腐った食品が届いたり、業者との連絡がつかなくなったりといった混乱状態になった。なんとか運よく届いた物資は、キャンパスの出入口である東門の外に届けられ、消毒液を噴射されて 2 時間以上放置されてから、完全封鎖されている棟以外の住民は順番に出入口まで取りに行くように指示があった。筆者のように完全封鎖されている棟の住民は、ボランティアスタッフの手によって塀の中に置かれるのを待ってから、順番に取りに行くという状況であった。ボランティアスタッフの人数は少なく、午前中にキャンパスの出入口に届いた物資でも夜 8 時を過ぎてから届く場合もしばしばあるため、生鮮食品や冷凍食品を買うのは気が引けた。また、食料品は数キロ単位のセット売りが基本であり、値段も通常時の 2〜3 倍するものしか買えない状況であったため、一人暮らしの筆者にとってはかなり不便だった。

10 月 19 日には、3 日間の買い物禁止令が出され、ネット注文やデリバリーを含む全ての買い物が禁止された。事前の予告もなく禁止となり、当日届く予定であった分も受け取れずキャンセルするはめとなった。

10 月 26 日には、翌日から嗜好品の買い物を禁止する指令が出され、お酒、タバコ、ジュース、お菓子、ミネラルウォーターといった商品を含む荷物はキャンパスの出入り口で受け取り拒否を行うと

いう連絡があった。

10 月 27 日には、前日の指令が訂正され、嗜好品だけでなく一切の買い物が 3 日間禁止となり、10 月 31 日にようやく野菜を受け取ることができた。

10 月 16 日以降 10 月 31 日現在まで、精神的にも身体的にも非常に厳しい状況が続いた。野菜などを買えたとしても、調味料全般の品切れ状態が続いており、塩や醤油、油も底を尽きて、味のしない茹で野菜を食べるしかない状況に追い込まれている住民もいるような状況だった。筆者も含めて、1 か月以上肉や豆腐を口にできず、白菜やジャガイモばかりで料理するしかない状況になっている人も多かった。また個人経営のお店から注文していても、配送員の健康チェックのルールが日ごとに変わるため、突然配送できなくなることもあった。店主に配送が厄介な地区だと一度判断されると、どれだけ注文が多くても、その日以降は配送対象外地区にされてしまい、全てキャンセルになるということもあった。住民だけでなく、ボランティアスタッフも皆、疲労困憊の状態であった。スタッフの人手が不足しているために、PCR 検査の実施時間が日中ではなく、深夜の午前 1 時や 2 時、早朝の 5 時からになる地区もあった。睡眠にも大きく影響し、生活リズムが狂う原因にもなってしまっているため、本末転倒ではないかと感じる人々は少なくなかったようである。

ボランティアスタッフの状況

ボランティアスタッフの状況について知るために、本特集執筆者の 1 人である格格日勒（ゲゲレル）氏の協力を得て、20 代男性 1 名（回答者 A）と 20 代女性 1 名（回答者 B）の合計 2 名に新型コロナボランティアに関する簡単なアンケートを行った。2 名に共通して尋ねた項目は以下に示す 5 つである。2022 年 10 月末から 11 月中旬にかけて、Wechat を用いて、格格日勒氏が回答者 2 名と中国語でそれぞれやりとりし、次のような回答を得た。質問および回答は全て中国語で得たが、便宜上、日本語訳のみをまとめて記す。

【項目 1】：ボランティアとして働いた期間と場所

（回答者 A）：2022/10/19～11/25、内モンゴル大学北キャンパス居住地区

（回答者 B）：2022/10/18（朝食の配送）、10/29・11/2・11/3・11/4（PCR 検査の実施補助）、内モンゴル東キャンパス学生寮

【項目 2】：ボランティアをしようと思った理由

（回答者 A）：居住地区の掲示板でボランティアの募集を見て、生活物資の入手が困難になっている時期に、住民の手助けをしたいと思ったため。

（回答者 B）：ルームメートがボランティアになったことを知り、自分もしようと思ったため。

【項目 3】: 新型コロナのボランティアスタッフの活動内容

（回答者 A）: 主に生活物資の消毒と受け渡しに関する記録。野菜、果物、牛乳、パン、お菓子等が届くので、消毒液を噴射して 2 時間後、順番に各棟に配送する。

（回答者 B）: 朝食の配送では、午前 7 時頃に学生寮の各部屋を回り人数分の朝食を配る。朝食の配送時には、防護服を着る必要はない。PCR 検査の実施補助では、23 時 30 分に防護服を受け取り、寮に戻って着用した後、担当の部屋を順番に回る。ドアをノックし、QR コードを読み取り、試験管と綿棒を配布する。配布して回った後に、もう一度各部屋を回り、試験管を回収し、使用済みの綿棒はごみとして回収する。回収作業が終わり次第、回収物を担当の人に渡し、防護服を脱いで捨てる。

【項目 4】: 金銭報酬あるいは非金銭報酬の有無

（回答者 A）: 報酬はない。でも毎日、昼ご飯と晩ご飯が支給される。たまに野菜、果物、パンなどが配られることもある。

（回答者 B）: 報酬はない。

【項目 5】: ボランティア活動を行う上で最も大変だったこと

（回答者 A）: 住民の中には、お年寄りだけのお宅や一人暮らししているお年寄りの方もいる。ネットで買い物をすることがお年寄りには難しいため、手助けできるのはボランティアスタッフだけなので、生活必需品を買うのを手伝っている。

（回答者 B）: ボランティアになる前は、学生寮における感染への心配は特になかったが、自身がボランティアをする際に、上の階で感染者が確認され、感染リスクが高くなったこと。消毒を徹底した。

筆者の居住アパートでは、電気代、水道代、ガス代の支払いを大学の事務の方が管理しており、カードにチャージする方式で支払うことになっている。そのため、大学が封鎖されて以降、事務の仕事も滞ってしまい、停電、断水、ガスの遮断が起きてもすぐには対応できない状況が生じたり、給料の支払いについても、会計課の事務員の方も大学構内に入ることができないため、支払いが遅延するという事態も生じていた。

南キャンパスの様子を学生に聞いたところ、10 月下旬には一斉検査場での PCR 検査はなくなったものの、学生寮で集団感染が起きてしまっており、陽性者や濃厚接触者は隔離施設へ移動しなければならなかった。バスで 6〜7 時間ほどの距離にある隔離施設へ向けて夜通し移動が行われることもあり、翌日の授業にも影響が出ていた。

大学の新型コロナ対応に関して言えば、大学の管理下のアプリで毎日の健康状態と、10 月 1 日以降は PCR 検査の実施状況についても毎日の報告が求められるようになった。オンライン授業の欠席者リストや新型コロナ関連の事情で欠席した学生のリスト等への記入も毎週行っているほか、新型コロナによる体調不良や隔離施設への移動も含めて、新型コロナ関連で授業を休まざるを得ない学生に対しては、オンデマンド配信をするなどの対応も別途必要となっていた。

2022 年冬のロックダウン第一波の時期は、特に社会的な混乱が大きかった。しかし、第二波では昨日できたことでも今日はもうできなくなっているかもしれない、今日できたことでも明日にはもうできないかもしれない、と常に明日への不安を抱え、気を張りながら生活せざるを得ない状況にあった。当時は、色々なことに嫌気も差してくるが、体調を維持することを第一に考え、気分を無理やりにでも切り替えながら、辛抱強く、状況が快方へ向かうことを待つばかりといった心境であった。

３．４．２．2 度目のロックダウンの第二波

2022 年 11 月に入ると、状況はさらに悪化した。新規感染者数が急激に増えたからである。前掲の図 2、表 2 にも示した通り、11 月初めから下旬にかけて、症状の有無を問わず著しく感染者が確認された。第一波をはるかに超える感染者が確認されたため、取り締まりは一段と厳しいものになった。日々の状況の変化について順に述べる。

11 月 1 日、居住地区管理下の PCR 検査はなかったが、抗原検査は実施された。封鎖の状況から、危険度レベルが既に中リスクや高リスクになっているのではないかと気になったため、居住地区の管理者に尋ねてみたが、分からないとの回答だった。当時、感染者がいない大学から順に、大学生の帰省が進められていた。内モンゴル大学では学生寮で感染者が出ていたために、帰省が許可される時期が遅れていたが、11 月に入り、内モンゴル大学南キャンパスの学生も一斉帰省が始まった。帰省にあたり、授業を欠席する学生が続々と出るため、教員としてはその対応に追われた。

11 月 2 日、PCR 検査が実施され、抗原検査は実施されなかった。筆者の居住棟は 6 つのユニットからなるが、筆者の居住ユニットを除く 5 つのユニットの住民は外に並ぶ方式で一斉に PCR 検査が行われたが、筆者の居住ユニットではスタッフが個別に訪問する方式で行われた。PCR 検査の実施方式がユニットによって異なるのは、10 月 16 日に同一ユニットで感染者が確認された影響が続いていたからである。しかし、玄関から一歩たりとも出られない状況から少し良くなった変化もあった。これまではユニットを囲む塀の中までボランティアスタッフの方が配送してくれるのを待ってから、塀の中で受け取るという流れであったが、11 月 2 日に届いたお肉セットは、キャンパスの入り口である東門まで取りに行くことができ、ボランティアスタッフの方に運んでもらうことなく、受け取れたのである。基本的には、野菜や果物などの食料品やそのたの生活物資は、消毒後 2 時間経過してからしか受け取れないことになっていたが、腐敗しやすい生肉だったためか、スタッフの方が配慮してくれ

て、消毒後すぐに受け取ることができた。約 1 か月ぶりにお肉が食べられるため、非常に嬉しかった。

11 月 3 日、4 日は、同様に PCR 検査のみが行われ、抗原検査は実施されなかった。PCR 検査の実施方式も変わらず、筆者の居住ユニット以外の 5 ユニットの住民は外で、筆者の居住ユニットでは個別訪問方式で実施された。

11 月 5 日には、PCR 検査と抗原検査の両方が行われた。PCR 検査の方式は同様である。リスク地区を示す貼り紙が確認できるようになり、ようやく危険度レベルを認識することができた。筆者の居住ユニットには中リスク地区（写真 21）、キャンパスの出入り口である東門には高リスク地区（写真 22）の貼り紙が貼られていた。「内大家属区」（内モンゴル大学教職員居住地区）が Web サイト上でも高リスク地区として表示されるようになった（写真 23）。 11 月 13 頃には居住地区ごとではなく、より詳しく棟ごとに表示されるようになった（写真 24）。この日には、筆者の居住棟の他の 3 つのユニットに 2 度目の塀が設置された。塀の設置に関して、事前連絡は特になかったため、住民の間では混乱が起きていた。また物資の配送に関する対応が厳格化しており、塀の有無に関わらず、物資は各ユニットの下にボランティアスタッフによって運ばれるようになった。3 日前にはできていた東門まで荷物を受け取りに行くということも、再びできなくなり、行動可能範囲が狭められた。

写真 21.　中リスク地区の貼り紙

写真 22.　高リスク地区の貼り紙

11 月 6 日も 5 日同様に PCR 検査と抗原検査の両方が行われた。PCR 検査の方式については前日から若干の変更があった。5 日に塀が設置された他の 3 ユニットも筆者の居住ユニット同様、個別訪問方式で行われるようになり、外で実施されるのは 6 ユニット中 2 ユニットのみとなった点である。筆者は 5 日に冷凍の鶏むね肉を購入しており、同日の昼 12 時半頃に東門の所まで届いていたが、届いた物資が多かったためか、高リスク地区に指定されたばかりであるためか、同日中には配達されなかった。居住地区の管理人やボランティアスタッフの方に、東門まで自分で受け取りに行ってもよいかと尋ねたが、配送担当のスタッフからの電話を待つしかないとのことであった。ようやく翌日 6 日の

昼頃に届けられたが、1 日中外に放置されることにはかなり気を揉んだ。当時の気温は、夜間は氷点下になるものの、日中は 10 度前後であったため、溶けてしまわないかと心配だった。3 袋のうち、1 袋分ぐらいは溶けてしまっていたが、心配していたほどではなく、無事にありつくことができた。

写真 23.　Web サイトでのリスク地区表示①

写真 24.　Web サイトでのリスク地区表示②

11 月 7 日は筆者にとっては大きな変化があった。筆者の居住ユニットの塀が撤去されたのである。塀の撤去に関しては、設置時と同様に、事前の連絡はなかったため、急のことで非常に驚いた。7 日当日から PCR 検査を外に並んでするようにとの指示があった。事前に配布済の抗原検査キットで抗原検査を各自行い、検査済のプレートを持って、PCR 検査の列に並び、順番が回ってきたら、抗原検査プレートをスタッフに渡し、PCR 検査を行うという流れである。外での PCR 検査の様子は写真 25 の通りである。久々に外に出て少し歩くことができたことに解放感を感じた。こうして、筆者の居住棟の 6 ユニットのうち、筆者の居住ユニットを含む 3 ユニットは外、他の 3 ユニットは個別訪問方式という状況になった。また、7 日からリスク地区の検索サイト（「疫情风险等级查询」）のリンクが PCR 検査結果の Web サイトの左上に貼られるようになり（写真 26）、リスク地区を調べやすくなった。調べてみたところ「内大家属区」（内モンゴル大学教職員居住地区）は依然として高リスク地区であった。

写真 25.　外での PCR 検査

写真 26.　PCR 検査結果サイトに貼られるようになったリスク地区検索サイト（左上）

2 度目のロックダウン第二波の真っ只中の封鎖状況の様子は写真 27～31 の通りである。

写真 27.　筆者自宅から東門までの道の塀

写真 28.　通行ゲートの塀

写真 29.　居住ユニットの塀

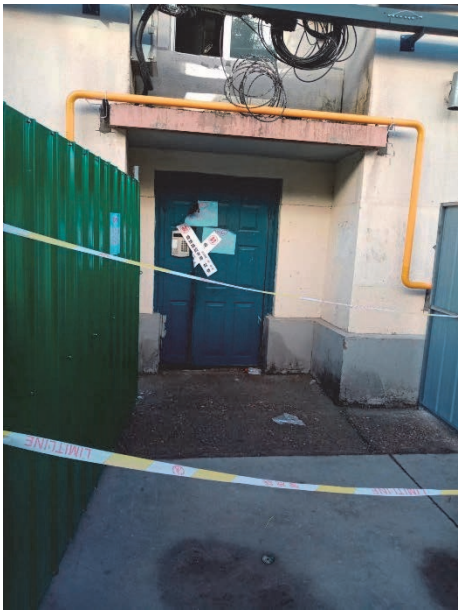

写真 30.　ユニット入口に紐が設置された様子

写真 31.　シャッターが下りている「出口」

写真 32.　シャッターが上がっている「出口」

写真 27 は筆者の自宅から東門に行くまでの経路に塀が設置されている様子である。写真 28 はキャンパス構内に入るための通行ゲートに塀が設置されている様子である。写真 29 は筆者の居住棟にユニットごとに塀が設置されている様子である。写真 29 は 11 月初めに撮影したものであるが、ユニットの入口のドアの前にも塀が設置されている。写真 30 は 11 月半ばに撮影したものであるが、封鎖および塀の設置は続いていたものの、ユニットの入口のドアの正面には塀ではなく紐が設置されるようになり、封鎖の方法が若干開放的になった様子がわかるだろう。なお、入口のドアには封鎖のための紙の札や貼り紙が貼られていた。写真 31 は筆者の自宅から最寄りの出入口である。「出口」と書かれ

ているが、住民は出る場合だけでなく、入る場合にもここを通る。この「出口」はシャッターがずっと下りたままで、完全に通常通りに開くようになったのは 2023 年 1 月 11 日になってからである。比較のために、シャッターが上がっている様子（写真 32）も載せておく。

11 月 8 日から 21 日にかけては、同様に PCR 検査と抗原検査の両方が行われた。7 日と同様に、筆者の居住棟の 6 ユニットのうち、筆者の居住ユニットを含む 3 ユニットは外、他の 3 ユニットは個別訪問方式で引き続き実施された。外での PCR 検査は天候に左右されることもあった。通常は朝に実施されていたが、朝から日中にかけて雨が降っていた 9 日は夕方 6 時ごろに真っ暗な中で外での PCR 検査が実施された。

11 月 12 日、危険度レベルの分類が従来の 3 分類から 2 分類へと変更された。従来は、高リスク・中リスク・低リスクの 3 分類であったが、以降は高リスク・低リスクの 2 分類になるという。従来の中リスク地区は低リスク地区に分類されることになり、高リスク地区は 5 日間連続で新規感染者が確認されなければ低リスクになるということであった。

11 月 13 日には、居住地区の感染および封鎖状況についての連絡があった。「内大家属区」（内モンゴル大学教職員居住地区）において、11 月 13 日までに封鎖されている居住ユニットは 5 ユニットであることや、11 月 13 日までに確認された症状あり確定感染者は、11 月 12 日の 1 例が最後であることが住民に知らされた。居住棟のグループチャット上では、最後に確認された症状あり感染者がどこで出たのかという質問が数人の住民から出ていたが、プライバシー保護のためか、返答はなかった。食料品の調達に関しては、11 月 9 日にお気に入りのケーキ屋さんで 2 種類のホールケーキのネット注文が可能になり、11 月 12 日からは一部のコンビニとスーパーでもネット注文が再開され、飲料水やお菓子も入手しやすくなった。また、11 月 19 日にはずっと休業していたキャンパス内の売店がネット注文の受付を再開した。感染対策のために、店舗での販売の再開はまだ先になるようだったが、ようやく売店での注文ができると思うと、精神的に少し楽になった。

11 月前半を振り返ると、食べ物には少し自由が出てきて、調味料もある程度揃うようになってきた。そのため、精神的にも少し緩和されたものの、PCR 検査の時以外は自宅からほぼ出られない生活が続いていることに変わりはなかった。塀が設置されており、散歩するにも非常に限られた狭い範囲のみで、キャンパスの外に出られないだけでなく、キャンパスの通行ゲートの中に入ることも、唯一の出入り口である東門にさえも行くことができない非常に閉鎖的な状況が続いていた。

11 月 17 日には、PCR 検査結果の検索サイトを閲覧するために中国籍の身分証番号の登録が必要になるようになった（写真 33）。従来は中国籍の人と同じように、この検索サイトから結果を閲覧できていた（写真 26）が、見れなくなってしまった。外国人にとっては残念な気持ちになる制度変更であった。

写真 33.　新制度の PCR 結果検索サイト

写真 34.　「青城码」に表示される 1 週間以内の PCR 検査結果

ただ、外国人が一切検査結果を見られなくなったわけではなく、過去 1 週間以内の検査結果であれば外国人でも「青城码」で PCR 検査結果が表示できるようになっていた（写真 34）。2 日以内の PCR 検査結果がある場合は写真 35 のようにホーム画面に表示され、2 日以内の PCR 検査結果がない場合は写真 36 のような表示となった。

写真 35.　「青城码」のホーム画面
（2 日以内の PCR 検査結果あり）

写真 36.　「青城码」のホーム画面
（2 日以内の PCR 検査結果なし）

３．４．３．2 度目のロックダウンも封鎖解除へ

11 月下旬に入ると、封鎖解除の兆しが少しずつ見えてくるようになった。

11 月 22 日から 27 日にかけて、引き続き PCR 検査と抗原検査の両方が実施されたが、PCR 検査の実施方式に変更点があった。11 月 21 日までは、筆者の居住ユニットを含む 3 ユニットは外、他の 3 ユニットは個別訪問方式での実施であったが、22 日から 27 日には 6 ユニットすべてで訪問検査が行われた。外での PCR 検査を実施せず、全ユニットで訪問検査になったのは、高リスク地区から低リスク地区へ下げる申請をするためであった。グループチャットに送られてきたお知らせによれば、当時「内大家属区」（内モンゴル大学教職員居住地区）において、最後に確認された感染者は 11 月 22 日に再陽性となった人であり、既に病院に移送中であるとのことだった。低リスクになるための条件は、人、物、環境全ての陽性ゼロが確認された次の日から数えて、5 日間連続で新規感染者ゼロであることだった。したがって 23 日から数えて 5 日後の 27 日まで徹底した検査が行われた。

申請後すぐに低リスクとなるわけではなく、審査に数日要したため、結果を待つ間の 28 日には PCR 検査のみが、29 日には PCR 検査と抗原検査の両方が行われたが、遂に 11 月 30 日には PCR 検査も抗原検査も実施されず、晴れて低リスク地区となり、封鎖が段階的に解除されることになった。

12 月 1 日には、PCR 検査と抗原検査がユニットごとに順に外で実施された。前日の 11 月 30 日には検査が実施されず、12 月 1 日に実施されたのは、低リスク地区では PCR 検査を 48 時間以内に 1 回

実施、高リスク地区および隔離されている人は 24 時間以内に 1 回実施するという規定に従うためだった。また 12 月 1 日には喜ばしいことに、自宅から東門までの道の塀が撤去されていることが確認できた（写真 27（再掲）、写真 37）。そして、キャンパス外への出入りが可能になり、通行証が再配布されることになった（写真 38）、10 月 3 日に配布された以前の通行証（写真 17,18）がある場合は新しい通行証は受取不要とのことだった。

写真 27（再掲）．筆者自宅から東門までの道
（11 月 1 日時点、塀あり）

写真 37.　筆者自宅から東門までの道
（12 月 1 日時点、塀なし）

写真 38.　キャンパス出入り用の通行証③

PCR 検査の実施が 2 日に 1 回となったため、12 月 2 日には検査は何も実施されず、12 月 3 日に 1 日と同様に PCR 検査と抗原検査がユニットごとに順に外で実施された。12 月 3 日の嬉しいお知らせと言えば、11 月 19 日にネット注文の受付を再開したキャンパス内の売店が店舗での販売も再開したことが挙げられる。営業を再開する飲食店も徐々に増えていた。キャンパスの外へ散歩に出かけたところ、東門にこれまで設置されていた各棟別の物資の置き場所が無くなっていることに気づいた。これもまた嬉しい変化だった。東門を出入りする際には、通行証、健康コード、PCR 検査結果の提示の全てが必要だった。久々に街中を散歩した時は、まるで旅行に来ているのかと勘違いするほど非常に新鮮に感じられた。

12 月 4 日は PCR 検査、抗原検査ともに実施されなかった。キャンパス外への外出に関して、新たな連絡があり、翌日から東門を出入りする際に PCR 検査結果の提示が不要になるが、居住地区に入る際の健康コードの読み取りは引き続き必要とのことだった。お気に入りのパン屋さんでテイクアウトのみネット注文を受付が再開されるなど、飲食店は段階的に営業を再開しているようだった。お店の営業の際には PCR 検査や抗原検査が陰性であることが条件となっていたために、2 日に 1 回の PCR 検査では仕事に支障をきたす従業員もいたようである。そのため、仕事上必要な人はいつでも PCR 検査が受けられる検査所が各地に設置されているとのお知らせがあった。

12 月 5 日、PCR 検査、抗原検査ともに実施されなかった。PCR 検査の実施に関してまた方針が変わり、2 日に 1 回ではなく、3 日に 1 回実施すればよいということになった。4 日に注文していたパンを受け取りに夕方に街に出たが、厳しい寒さのためもあってか歩いている人の姿はさほど見られなかった。しかし、車通りはロックダウン以前の 6 割 7 割程度にまで回復しているような印象を受けた。

12 月 6 日と 7 日には PCR 検査のみが任意で実施された。12 月 8 日には、全ての居住地区において健康コードのスキャンおよび PCR 検査の結果提示が不要となるという連絡を受けた。午後 6 時 7 時ごろには盛大に爆竹が鳴らされている音が聞こえ、封鎖解除を各地で祝っていることを実感した。12 月に入ってからというもの、封鎖が解除される地区も多く、夜になると花火や爆竹が鳴り響くことが増えた。夜 10 時、遅い時には深夜 0 時頃に鳴ることもあり、慣れていないために驚いて飛び起きてしまうこともままあった。

12 月 9 には、ロックダウン終了の正式な連絡が入った。居住地区の出入りには健康コードのスキャンも PCR 検査の結果提示も不要であることに加え、正式に全域 PCR 検査も終了したというお知らせだった。発送が滞っていた近隣地区以外からの宅配便もついに発送されるようになった。9 日夜に確認した時には、東門の塀も通行ゲートの塀も完全に撤去されていた。ただし、「出口」のシャッターが完全に開くようになったのは 2023 年 1 月 11 日からと、全ての出入口がすぐに完全に元通りになったというわけではなかった。

12 月の初めに街を散歩していて、まず最初に感じたのは営業しているお店はやはりかなり少ないということだった。売りに出ている店舗も少なくなかった。特に印象的だったのは新型コロナの封鎖による貼り紙がシャッターに貼られているお店が多く見られたことだ。写真 39 のお店もその一つである。シャッターには写真 40 の貼り紙が貼られている。「疫情防控专用 封条」と書かれている。飲食店では、通常営業を再開しているお店もちらほら見られる一方で、「不可堂食 只可外卖」（店内での飲食不可、デリバリーのみ可能）という貼り紙をしているお店（写真 41）や、テイクアウトのみ受付可能とするお店なども多く見られた。いきなり店舗での営業を再開するのではなく、段階的に再開していっているようであった。全国展開しているチェーン店よりも、個人経営のお店の方が再開の時

期が早いのではないかと感じた。また驚いたことの一つに、パン屋さんのレジに立つ店員が防護服を着ていたことが挙げられる（写真 42）。防護服で接客する店員を見られるのは後にも先にもこの時期しかなかったであろう。コロナ禍の特殊な状況下でしか見られない異様な光景だと感じた。

写真 39.　封鎖の貼り紙がされているサロン

写真 40.　封鎖の貼り紙

写真 41.　デリバリーのみ可能なラーメン店

写真 42.　防護服を着てレジに立つ店員

12 月後半には人通りも車通りもほぼ完全復活という印象を受けた。街全体の活気が戻る一方で、ゼロコロナ政策の大幅緩和に伴い、感染が爆発的に拡大したことで、フフホトでももれなくウイルスは蔓延していた。外出を控えている人でも周りにかかっていない人はいないというほどにほとんどの人

が新型コロナに感染するというある意味恐ろしい状況が待ち受けていた。筆者も例外ではなかった。ちょうどクリスマスという時期に喉に強烈な違和感を覚えたかと思うと、急激に高熱が出て、明らかに新型コロナにかかったのだと実感した。検査を受けたわけではなく、あくまで自己判断ではあるものの、当時は周囲に新型コロナの症状が出ていない人がいないほどに新型コロナが蔓延していたことも踏まえると、自身の新型コロナ感染は間違いないと思う。年末年始にかけて、新型コロナの諸症状に苦しみ、お正月を過ぎてもなお完全には体調が戻り切らないという経験をして初めて、新型コロナはやはり普通の風邪ではなかったのだと感じた。

４．おわりに

オミクロン株の感染拡大による 2022 年秋冬のロックダウンの状況は、デルタ株の感染拡大による 2022 年春の厳しい外出制限とは比べ物にならないほど精神的にも身体的にもダメージが大きいものであった。しかし思い返せば、夏季休暇中の 7 月には、青海省海西モンゴル族チベット族自治州ウラン県、内モンゴル自治区オルドス市オトク前旗、北京市の 3 か所に旅行に行くことができていた。本来はアラシャーへの再訪を計画していたが、コロナ禍だけでなく国際情勢の影響を考慮し断念せざるを得なかった。北京での滞在は 1 日だけであり、単なる日帰り旅行に過ぎなかったが、外国人の対応に慣れている店員やスタッフが多く、フフホトよりも滞在しやすいのではないかという印象を受けた。フィールドワークのきっかけ作りを兼ねた青海省とオルドスへの旅行では、コロナ禍のために休業している観光地がいくつかあったり、行く先々で健康コードの提示が求められるといった影響はあったものの、コロナ禍であることを忘れられるくらい楽しく充実した時間を過ごすことができた。屋台のグルメを味わったり、デパートで買い物をしたり、宴会で同じ杯を回し飲みするといったこともコロナ禍以前と同様に楽しむことができた。

コロナ禍の状況が悪い時期は、ただちに厳戒態勢が敷かれるが、状況がそれほど悪くない時期には健康コードさえあれば不自由なく生活ができる。ネットショッピング、デリバリーは日本以上に便利だと感じることも多く頻繁に利用している。新型コロナによって状況が一変するという危うさはあるものの、臨機応変に即時対応できる力を身に付けることのできる絶好の機会であるとも思う。ゼロコロナの緊張感が解かれた 2023 年 1 月現在、健康コードや検温、PCR 検査、抗原検査からも離れることができ、街に活気は戻っているが、決してコロナ禍以前と全く同じ元通りの生活ではない。マスクを着用していない人も確かに見られるが、やはり着用している人の方が多い印象を受ける。アルコール消毒も習慣となっている。今はただ、「新型コロナ？ああ、そんな時期もあったね、忘れてたよ」と言える日が来ることを願うばかりである。

（げか　あおい・中国　内モンゴル大学外国語学院）

Long-term stay in Inner Mongolia, China, under China's 'Zero-COVID' policy: Lockdown experience in Hohhot City

Aoi Geka

I have been in China—primarily in Inner Mongolia—from September 1, 2019, to January 2023, except for a temporary return to Japan from February 20, 2020, to April 27, 2021. In this paper, I report my experiences in China during the COVID-19 pandemic. First, I describe my stay as a foreign student in Hohhot City and Alxa (Alashan) League in Inner Mongolia, before and during the early stages of the pandemic. Second, I discuss my trip to Hohhot in Inner Mongolia, as a Japanese language teacher experiencing two lockdowns during the tightening of restrictions in response to the pandemic. Finally, I summarize my experiences during the pandemic and offer my outlook for the future in light of the current situation of relaxing the China's 'Zero-COVID' policy.